

心 残 り の 記

橋 本 隆 夫

このように早く亡くなられるとはその時は思ってもいなかった。一昨年の初夏の頃に、先生から「オイディプス王」再考の論文を送っていただいた。内容は今年の西洋古典学会誌に掲載されている同題名の論文とは異なる。一昨年の論文には、「個人的体験と文献学」という副題がついていて、悪性腫瘍の疑いを知って、精密検査を受けることになるご自分の体験に照らしてオイディプス問題を考察した論文である。頂戴してすぐに目を通したが、あまりに生々しい記述のために、作り物であるオイディプスの物語と比較することさえはばかれるような畏れに似た気持ちを抑えることができなかった。亡くなられたあととなると、一層その感が強い。通りいっぺんのお返事しか書けなかったことを申し訳なく思っている次第である。

「オイディプスが真実を求めているからではなく、真実から必死になって逃れ、自分の無実を証明するよすがを求めようとしているからである」(全集「解説」)と述べたことも、「言い過ぎのように思われる」とお書きになった上で、癌の疑いを宣告されたご自分のお気持ちを、「自分が犯人かもしれない」と疑うオイディプスに投影されて、「癌が真実であれば、(自分のためのみならず家族のためにも)なんらかの治療によって癌(真実)から逃れることを望むのではないか」と指摘されておられる。先生のいわれる「真実を恐れ、真実を求めるオイディプス」(同上、330頁)の実像はこの点にあるといえるであろう。この微妙な一点を見落とせばオイディプスの激しい真実追求の姿勢の根拠が失われるのである。

5年前の「オイディプスと真実」の大論文にひきつづいて、オイディプス問題を日頃から考えてこられたたゆまぬ努力と強い意志、そして不治の病と覚悟なさりながらも、なおも絶筆といってよい今年のご論文にあらわれている研究への強靱な意欲にはいまさらながらただただ敬服するばかりである。

先生とはじめてお会いしたのは、ドイツ留学からお帰りになった直後のことで、松本仁助先生と幾人かで開いた三条の橋のたもとの小料理屋での歓迎の集まりであったかと思う。もの静かなたたずまいのなかで、松本先生とはマイン

ツのことなどお話をさっていたことが昨日のように思い出される。しかし、ことホメロスの話題になるとなかなか自説を曲げないところがあって、お若い頃の気分はずっと続くものだといふと今になって感じ入っているところである。

まだ仕残したお仕事がたくさんおありだったかと思いはかるのだが、キケロ選集の刊行も道半ばのところであったのでさぞお気がかりも大変だったにちがいない。ギリシア研究もさることながら、きっとラテン文学の研究についてはもっと成果をまとめる時間を必要とされていたであろう。その時間も永遠に奪われたことは先生御自身にはさぞご無念であったろうし、わたしたちにもかえすがえすも残念でたまらない。先生のご冥福をお祈りするばかりである。

平成12年10月30日